



TITLE:

系統研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

江原, 昭善; 野上, 裕生; 相見, 満; 瀬戸口, 烈司; 松本, 真

CITATION:

江原, 昭善 ...[et al]. 系統研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1985, 15: 26-27

ISSUE DATE:

1985-10-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163578>

RIGHT:

回日本生化学会, 生化学, 56(8), 744.

- 9) 勝又義直, 堤 肇, 中村 伸(1985): ウサギ由来抗ヒト全血清に対する霊長類血漿の交叉反応についての定量的検討。第29回プリマーテス研究会, 抄録 pp. 32.
- 10) 堤 肇, 勝又義直, 中村 伸(1985): 間接凝集阻止試験法による霊長類血漿タンパク質の抗原性比較。第29回プリマーテス研究会, 抄録 pp. 33.
- 11) 中村 伸, 鈴木宏治, 西岡淳二, 橋本仙一郎(1985): 霊長類の止血-凝固系: ヒト化過程における特殊化の可能性。第29回プリマーテス研究会, 抄録 pp. 34.
- 12) 中村 伸(1985): 蛍光基質を用いた共役アミダーゼ法による白血球(単球・マクロファージ) tissue factor の活性測定法。日本薬学会第105年会, 要旨集 pp. 290.
- 13) 浅岡一雄(1985): 肥満細胞グルタチオンS-トランスフェラーゼの特性。第105回日本薬学会大会, 金沢。
- 14) 佐藤 浩, 浅岡一雄, 仙波禮治, 青野幸子, 柏俣重夫(1985): 黄疽 Gunn ラット小脳におけるグルタチオンS-トランスフェラーゼ。第44回日本生化学会中部支部会, 三重。
- 15) 野口淳夫, 後藤裕子, 羽柴克子, 村山裕一, 大神雅史, 藤崎正美, 桜山のり子, 古川敏紀(1984): ニホンザル白血球抗原の研究(Ⅱ)。
1. 新しい JMLA 抗原 2. ヒトリンパ球サブセット抗原の示すニホンザル自然群の南北 tread。第14回日本免疫学会総会, 大阪。

系統研究部門

江原昭善・野上裕生・相見満・瀬戸口烈司
松本 真¹⁾

研究概要

- 1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究
江原昭善
 1. ヒトおよび霊長類の下顎骨の機能的・形態学的研究
 2. ヒトおよび霊長類各分類群における頭蓋底部と posture の関連。
- 2) ケニアおよびエチオピアにおける化石霊長類および化石人類の研究

江原昭善

- 3) 東海地方先史遺跡出土人骨・動物骨の研究
江原昭善・相見満・松本真・木下實
- 4) 東海洞窟遺跡の人類学的・先史学的研究
江原昭善・相見満・松本真・木下實
- 5) 硬組織の形態学的研究

野上裕生

- 6) スマトラにおける第四紀地史の研究

野上裕生

- 7) ジャバ島における第四紀哺乳類の研究

相見 満

- 8) スマトラにおける霊長類の形態学的研究

相見 満・松本 真

- 9) 第三紀食虫類・原猿類および有袋類の研究

瀬戸口烈司

1. 南米出土化石について

瀬戸口烈司・名取真人

2. 南アメリカ大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

論文

- 1) 瀬戸口烈司(1984): 化石からみた分子時計の有効性 — 南米ザル系統研究の例から — 科学, 54, 301~307.
- 2) 松本 真(1984): 頭骨の置きかた — 基準平面の設定 — 成長, 23(2), 31-39.

報告・その他

- 1) 江原昭善・松本真・木下實(1984): 吉胡貝塚 — 貝層剥ぎ取り作業にともなう調査「田原の文化」特集, 第10号。田原町教育委員会。
- 2) 江原昭善・松本真・木下實(1985): 伊川津遺跡調査概要。渥美町教育委員会。
- 3) 江原昭善・松本真・木下實他(1984): 三和町洞窟・岩陰遺跡発掘調査報告書 — 昭和57年度 — 。京都大学霊長類研究所。
- 4) Matumoto, S. and Amsir Bakar, (1984) "Investigation of three primate collections in Southeast Asia." Kyoto University Overseas Research Report of Studies on Asian Non-human Primates. 3, Primate Research Institute, Kyoto University: pp.77-84.

- 1) 研修員

学会発表

- 1) 江原昭善・松本眞・木下實(1984): 伊川津貝塚出土の集積墓(仮称)。第38回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 2) 相見 満(1984): コノハザルの分布の展開について。第38回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 3) 瀬戸口烈司(1985): 中新世のマーモセット化石 — 世界ではじめての発見 — 第29回プリマーテス研究会。
- 4) Setoguchi, T. and Rosenberger, A. L. (1984): New Fossil Monkeys from the La Venta of Colombia, South America. 44th Annual Meeting of the Society of Vertebrate Paleontology, Berkeley, California, USA.
- 5) 松本 眞(1984): ヒトの直顎性の特徴。第38回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 6) 松本 眞(1985): リーフモンキーの四肢のプロポーション — *cristata* と *malalophos* の比較 —。第29回プリマーテス研究会。
- 7) 中久喜正一・江原昭善(1985): マントヒヒの肝臓内血管分布と肝葉区分。第29回プリマーテス研究会。

ニホンザル野外観察施設

川村俊蔵(施設長・兼)・東 滋・渡辺邦夫・足沢貞成¹⁾

本研究所は従来よりの幸島観察所のほかに、ニホンザルの分布北限である下北、南限である屋久島、中部日本の変日本型気候の上信越、表日本型の木曽の4つの研究林地域をもっている。これら5つのニホンザルの代表的な生息地について研究保護区としての維持をはかり、長期的に安定した条件の下で、ニホンザルの野外研究を展開させることが本施設の任務である。

昭和59年度の各フィールドステーション関係の活動状況は次のとおりである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは過去30数年間継続観察されてきており、群れの各成員の出自、生い立ち等々詳細な資料がととのえられている。群れの現状であるが今年度は過去最高の23頭という大量の出産がみら

れた。その原因は島内の食物が、前年の秋に豊作であったこと、長年未経産のままでいた個体が多く出産したことなどがあげられる。しかしその後1～3月の間に次々に死亡し、3月末までの幼児の生存数は9頭となった。一方で幼児の死亡した母親がひきつづき共倒れの的に死亡する例も多く6頭のオトナメスが死亡している。3月ごろからは島が地づきになりはじめ、干潮時には約100m程度の砂地で結ばれる状態であり、観光客について島から出てくるサルを見張らなければならないことが多くなった。60年3月31日の時点での島内の個体数は主群66頭、マキグループ15頭、ハナレザル10頭を含め91頭である。

今年度は五百部裕による林内での社会交渉の研究、岩本俊孝(宮崎大)による採食戦略の研究、樋口義治(愛知大)による野外でのオペラント学習実験等が行われた。また特定研究「生物の適応戦略」の一環としてイモ洗い等の文化的行動の解析(河合雅雄・渡辺・樋口)、攻撃場面における第3者の役割(渡辺)、子ザルの成長と発達(森梅代)、採食戦略(森明雄)等の研究が継続して行われている。今年度訪れた研究者は延べ376人日であり、他に大学や報道機関等々の訪問者は約延100人日であった。

2. 下北研究林

1984年4月～11月、遊動と土地利用、社会行動の調査が岡野美佐夫(北大・文)、足沢によって行われた。非積雪期の長期調査としては、下北西北部で初めての試みである。積雪期の調査は12月10日入山、同15日から1985年4月5日の112日間、M群の連続追跡を行い主として遊動と土地利用、採食生態、食物資源量の分布と変動についての研究を綿貫豊・中山裕理(共同利用研究員、北大・農)、足沢、東らが行った。これと平行してI群およびARA群の遊動追跡が短期、断続的であるが行われた。

下北研究林の発足後10年に当たり、報告会を行った(12月24日、むつ市下北教育会館)。

3. 上信越研究林

横湯川流域の植生とseed trap法による果実生産量の調査(小見山章、岐阜大)志賀C群の生態、行動調査(陸齊・片山百合夫・丸山勝規、東京農工大)、志賀A₁、A₂、B₂、C群の戸籍簿作り(常田英士、地獄谷野猿公苑)がひきつづき行われた。

横湯川下流域の山ノ内町で頻発する猿害問題について、山ノ内町が猿害対策委員会を組織して対処し始め、和田一雄がそれに参加した。

¹⁾ 教務補佐員